日日新聞　平成17年（2005年）4月12日　火曜日

南阿蘇

吉田 愛梨

里の風

集落内にある「天神様」の美化作業に参加した。間伐をして整地し直す、結構大掛かりな作業だった。出る義務はなかったのだが、天神様は我が家の真正面にある。集落の人々が美化作業のために集まってくる様子を窓越しに見ていたら、私もじっとしていられなくなった。

作業を始めて間もなく、樹齢五十年以上のヒノキがものの五分で切り倒された。あまりのあっけなさに呆然（ぼうぜん）としていると、倒れた木のそばで近所のおじいさんが何やら黙々と手を動かしている。手元をのぞき込むと、切ったばかりのヒノキの小枝を持っている。切り口をカッターで斜めに削っていた。私が見ているのに気づくと、「ヒノキはつがるけん、植えておくとたい」とニッコリ。そしてふと手を止め、私の目を見て言った。「このヒノキを切るときが来たら、こんなじいさんがいたってこと、思い出してね」

人生初の田舎暮らし

私たち夫婦が白水村（現南阿蘇村）に越してきたのは二年前。天神様のある中郷（ちゅうごう）集落には、義父の実家があり、祖父母とおじが住んでいる。おじは専業農家だが、後継者はいない。唯一の候補者である夫は熊本市内育ち。東京の大学に進学し、「東京のヨメゴ」をもらった。後継者の不在は、祖父にとって頭の痛い問題となった。

ところが、海外の大学院を卒業すると、夫は「中郷で農業をする」と言い出した。家族や地域の人々は期待半分、心配半分。空き家を借りて住み始めた私たちの家に、しばらくは様子を伺いに来る人が絶えなかった。

見習いから始めた米作りは今年で三度目。村の行事にもよく顔を出す。「どうやら本気バイ」。周囲はそんな風に思い始めてくれているようだ。

人生初の田舎暮らしは、予想以上に楽しい。地域社会がしっかりと残っていることには感動すら覚える。美化作業があった日の晩、天神様でのできごとを夫に話し、二人で心に誓った。あのヒノキがつがったら、手入れをして孫の代まで大事に育てよう。集落の人々が守ってきた風景や風土とともに。そして立派に育ったヒノキを切る時が来たら、小枝を削ってまた植えよう。おじいさんがしていた通りのやり方で。

絵・有働　孝昭

◇**よしだ・えり**　1974年、ドイツ生まれ、東京育ち。本名は大津愛梨だが、仕事では旧姓を使用。無農薬米や減農薬キュウリ、あか牛を育てる傍ら、環境計画の仕事を続ける。NPO法人九州バイオマスフォーラム理事長。